

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

「ほっと」や生活アンケートの実施（年2～3回）分析及び校内研修や学年会議等での活用

岩見沢市立東光中学校

岩見沢市立東小中学校・岩見沢市立岩見沢小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

推進校が連携し、各種調査やアセスメントから児童生徒の人間関係における課題を明確にし、児童生徒がよりよい人間関係を築くことができる力の育成に向け、ピア・サポートプログラムを用いた授業展開及び校区の教職員による主体的な授業改善に取り組んでいる。

## 取組の実際

### 1 「ほっと」「Q-U」を活用した校区の児童生徒の実態把握

「Q-U」の分析に加え、昨年度より校区3校で子ども理解支援ツール「ほっと」の分析を始めた。それぞれの学校で各質問項目に「1」をつけた子どもを見落とさないために、校内研修で結果を交流し学校全体の状況を共有している。また、各学級や学年の傾向・特徴を把握し、生徒指導部が中心となって改善策を立て、組織的に対応している。今年度は、児童生徒の人間関係づくりにおける能力の育成を3校が系統立てて行うために、校区の特徴を把握するため各校担当者が連携して調査と分析を行った。コミュニケーション能力に関わる要素の項目で、平均が3.0を下回ったものについて共有した結果、小・中学校ともに「表明」「緊張」「率先」の項目が共通して低い数値となった。また、数値が低かった項目の質問内容を比較すると、人前で発言をすることに対して苦手意識をもっていることが分かった。

### H30 東光中学校区 こども理解支援ツール「ほっと」集計 1回目

	礼儀	表明	参加	配慮	拒否	緊張	称賛	遵守	忠告	自律	率先	学業	相談								
東光中学校平均	3.44	3.59	2.93	3.17	3.3	3.54	3.38	3.61	2.63	2.51	3.54	3.47	2.63	2.78	3.11	2.62	3.15	3.54	3.45	3.08	3.57
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18	Q19	Q20	Q21
岩見沢小 高学年平均	2.95	3.45	3.25	2.8	3.2	3.4	3.15	2.5	3.35	3.15	3.1	3	3.4	2.65	3.35	2.95	3.15	3	3.65		
東小 高学年平均	3.37	3.71	3.37	2.84	3.44	3.53	3.81	2.81	3.69	3.19	3.55	3.65	3.35	3.46	3.11	3.54	3.3	3.19	3.33	3.63	
校区小学校 高学年平均	3.16	3.58	3.31	2.82	3.32	3.46	3.48	2.66	3.52	3.17	3.32	3.33	3.17	3.43	2.88	3.45	3.12	3.17	3.17	3.64	
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18	Q19	Q20	Q21

#### 中学校の課題

Q3 少数意見であっても、自分の考えをしっかりと言うことができる。  
Q9 友だちにどう思われるか不安で、本音を話すことができない。  
Q10 緊張して人前で話すことができないことがある。  
Q13 みんなのやる気高める発言をすることができる。  
Q14 まわりに迷惑をかける人に注意することができる。

#### 小学校の課題

Q4 少数意見であっても、自分の考えをしっかりと言うことができる。  
Q8 友だちにどう思われるか不安で、本音を話すことができない。  
Q15 緊張して人前で話すことができないことがある。

### 2 聴く側の姿勢の育成 ～授業改善・児童生徒の学習スキル向上～

児童生徒の実態把握を踏まえ、東光中学校区では、日常の授業場面を中心とした「ピア・サポートプログラム」を展開し、人間関係づくりの基礎的能力を育てることをねらいとして、児童生徒が安心して意見を言い合える授業づくりを推進している。

#### 成果 (○) と課題 (●)

- 「ほっと」「Q-U」の結果を小・中学校で分析したことにより、中学校区の児童生徒の傾向・特徴が明らかになった。
- 中学校区の教職員、保護者の指導の在り方や関わり方について共通理解が図られるよう、「ピア・サポートプログラム」の実践を校区で計画的に進める必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続による工夫改善

学校行事、児童会・生徒会活動の合同実施による児童生徒の交流など、小・中学校が連携した取組の実施  
 滝川市立明苑中学校  
 滝川市立滝川第三小学校・滝川市立東小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

各種行事における交流を通じて小学生に中学校生活への見通しをもたせるなど、子ども同士の繋がりを具現化した小・中学校の連携を図っている。

### 取組の実際

#### 1 小学校の学習会への中学生派遣

各小学校で実施されている長期休業中の学習会に中学生が学習ボランティアとして参加している。

中学生は責任をもって小学生に接し、小学生も真剣に学習に取り



【滝川第三小学校の様子】



【東小学校の様子】

組む姿勢が見られるなど相乗効果が生まれた。また、中学校入学後は、自分が小学校へ教えに行きたいという思いをもつなど好循環が生まれ、取組が定着するなど子どもたちの貴重な交流の場となっている。

#### 2 中学校生徒会行事「いじめ撲滅集会」への小学生参加

毎年11月に開催している中学校の生徒会行事「いじめ撲滅集会」に校区2校の小学校6年生が参加している。



【集会に参加する6年生】



【集会で発表する6年生】

生徒会がいじめの定義等について、寸劇を通して小学生に分かりやすく解説するなど、中学生がリーダーシップを発揮する場面となっている。また、小学生が「いじめ撲滅スローガン」の採択に参加して自分の意見を反映・発表する場面を設けるなど、中学校入学に向けた意識付けに繋がっている。小学生からは「中学生のすごさを知りました」「中学校に入ってからいじめは絶対に許さずに誰とでも仲良くする人になりたい」などの感想が聞かれ、いじめについて、中学生と小学生が同じ場で考えを共有する貴重な交流の機会となった。

### 成果 (○) と課題 (●)

- 子ども同士の交流場面を設け、他者との仲間意識を育む取組を行ったことにより、集団活動での達成感や充実感を感じたり、前向きに取り組もうとする子どもが増え、自己肯定感を養う機会となった。
- 小・中学校の円滑な接続に向けた取組の充実を図るよう、実施に向けた打合せ時間の確保や指導内容の共通化など、組織的・計画的な取組を推進する必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

## 「Q-U」の結果分析及び校内研修や学年会議等での活用

石狩市立樽川中学校・石狩市立南線小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

石狩市では、市内全小・中学校において、「Q-U」を実施している。樽川中学校及び南線小学校では、年2回、全児童生徒を対象に実施し、分析結果から学年・学級集団及び児童生徒個人の課題を全教員で共有し、日常の学年・学級経営、教育相談等における指導の工夫改善に努めている。

## 取組の実際

### 【「Q-U」の結果の比較】

#### 1 「Q-U」の分析結果とその活用

6月、12月の年2回実施し、学級担任が分析結果をシートにまとめ、全教員で共有している。学年・学級集団の状況を把握し、児童生徒理解を深めるとともに、小・中学校で情報を共有している。学級満足度尺度において、どの群に属しているのかを確認するとともに、児童生徒がどのような思いで、学校生活を送っているかを把握して、具体的な対応策を検討した。

##### (1) 学級満足度尺度

学級集団への適応感を高め、日常の活動に、主体的に取り組む意欲の向上を図っている。また、生活不満足群の要支援群に位置する児童生徒について、個別の支援策を検討している。また、6月と12月の結果を比較し、個に応じた指導や支援の在り方を検討した。

##### (2) 学校生活意欲尺度（友人、学習、学級、進路、教師の5領域）

学校生活意欲尺度に基づき、一人一人の児童生徒が5領域（友人、学習、学級、進路、教師）の中で、何を学校生活の拠り所としているのか、何に不安を抱えているのかを把握し、その後の指導や支援の在り方を検討した。

#### 2 分析結果の情報共有による指導や支援の充実

11月に「小中連携研究会」を実施し、不登校傾向の児童生徒や特別な支援を必要とする児童生徒について、「Q-U」の分析結果を基に交流した。小・中学校の教員が児童生徒の状況を共有することにより、小・中学校の連携を強化し、統一した取組を推進した。

1年	6月	12月	差	全国平均
生活満足群	58%	63%	5%	37%
非承認群	21%	16%	-5%	17%
侵害行為認知群	8%	4%	-4%	15%
生活不満足群	13%	18%	5%	31%
2年	6月	12月	差	全国平均
生活満足群	52%	51%	-1%	37%
非承認群	20%	16%	-4%	17%
侵害行為認知群	10%	11%	1%	15%
生活不満足群	18%	22%	4%	31%
3年	6月	12月	差	全国平均
生活満足群	66%	65%	-1%	37%
非承認群	13%	12%	-1%	17%
侵害行為認知群	9%	7%	-2%	15%
生活不満足群	13%	16%	3%	31%

### 成果（○）と課題（●）

- 小・中学校で「Q-U」の分析結果を共有したことにより、児童生徒理解が深まるとともに、指導や支援の在り方について共通理解が図られ、小・中学校で統一した取組を推進することができた。
- 「Q-U」の結果分析に基づき、生活不満足群に位置する児童生徒が増加傾向であるため、今後、より一層、小・中学校の連携を深め、児童生徒に対するきめ細かな指導や支援を行う必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

### 「ほっと」等アンケート活用の取組

小樽市立朝里中学校  
小樽市立朝里小学校・小樽市立豊倉小学校

#### 効果的な取組とするためのポイント

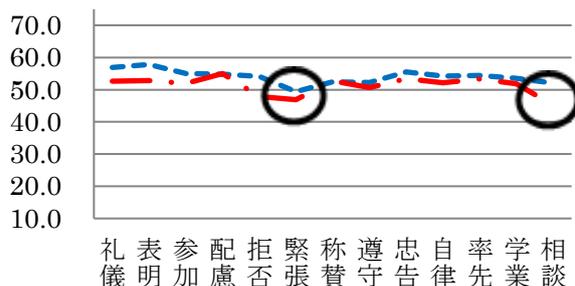
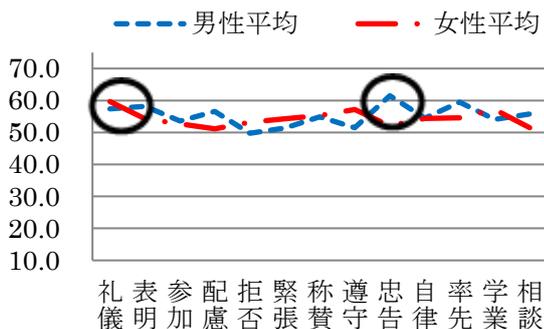
中1ギャップ問題未然防止担当者を中心とした組織による子ども理解支援ツール「ほっと」の理解を深める研修を実施し、第1学年における「ほっと」「ほっとプラス」の実施及び結果分析を踏まえた生徒の実態把握に努めている。

### 取組の実際

#### 1 子ども理解支援ツール「ほっと」の活用に向けた取組

朝里中学校では、平成28年度まで「アセス」を全学級で年間2回実施し、生徒理解に努めていた。平成29年度からは、コミュニケーション能力や日常生活等への満足度、精神的な安定度など児童生徒をより深く理解することを目的に、子ども理解支援ツール「ほっと」を活用することとした。「ほっと」の活用に当たり、中1ギャップ担当教員と教育相談係が中心となり研修を進め、全教職員で理解を深めた。

【「ほっと」で明らかになった第1学年の13要素偏差値】



左平成29年度、右平成30年度 第1学年1回目の平均

経年変化を分析すると昨年度の第1学年は、「礼儀、表明」「忠告、自律」で高い数値を示しており、学校経営の重点である「居心地のよい集団づくりと組織的な積極的生徒指導の展開」の成果が見られた。平成30年度は、小学校との引継ぎの段階で女子間の人間関係にやや心配な面があるということであった。女子の「緊張、相談」が例年と比較して低い数値となっており、個々への配慮という面からも「ほっと」の分析結果の活用が非常に有効であった。

#### 2 複数回実施によるデータの分析及び活用

PDC Aサイクルの活用に当たり、各種アンケートの実施は重要である。「ほっと」の活用と合わせ、研究部では、毎学期生徒アンケートを実施・分析し、生徒が安心して過ごすことができる学校づくりに取り組んでいる。「朝里中の先生はだめなことはだめと厳しく指導し、一人一人の生徒を大切にしてくれる」「朝里中の先生は生徒の声に耳を傾け、困ったことや悩みなどにしっかりと対応してくれる」の設問に対し、いずれも96%以上が肯定的に捉えている実態を把握できるなど、「ほっと」の活用と合わせて、生徒理解に非常に有効であった。

#### 成果 (○) と課題 (●)

- 「ほっと」「ほっとプラス」の実施による検証を経て、経年変化の分析により、「ほっと」への信頼感の高まりを実感することができた。また、他のアンケートを組み合わせ、多面的に生徒の意識を把握することで、きめ細かな生徒指導を行うことができた。
- 義務教育9年間での児童・生徒理解を一層確かなものとするため、小学校においても「ほっと」を複数回実施することにより、児童生徒の変化に対応する必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

「ほっと」や生活アンケートの実施（年2～3回）、分析及び校内研修や学年会議等での活用

共和町立共和中学校・共和町立東陽小学校  
共和町立北辰小学校・共和町立西陵小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

子ども理解支援ツール「ほっと」の活用による各学年・学級での客観的なデータを生徒指導担当者部会において共有し、進級・進学時の引継ぎ資料として活用している。さらに、「ほっと」の分析結果についての研修会を開催し、児童生徒理解を充実させるとともに、生徒指導の改善に努めている。

## 取組の実際

### 1 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施と分析

#### (1) 「ほっと」の実施

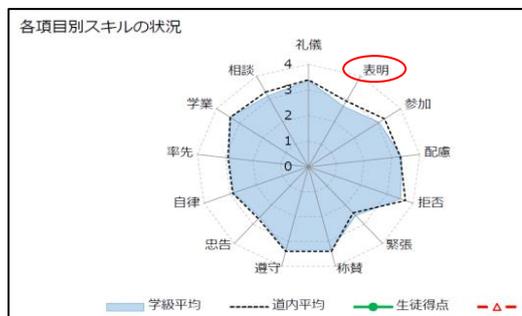
夏季休業前と冬季休業前の2回実施した。

#### (2) 結果の分析及び共有

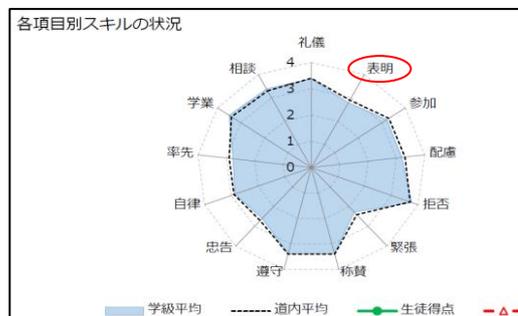
生徒指導担当者及び該当学年担任を対象として、講師による分析結果についての解説・意見交換を実施し、小学校においては各校で違った傾向が見られること及び中学校入学後に特定のスキルが低下するという現状を確認した。

### 2 分析結果を生かした取組

#### (1) 「ほっと」の13要素偏差値（※結果グラフについては、中学校1学年を抜粋）



共和中学校1年A組



共和中学校1年B組

分析結果については、町の特徴として、中学校における「表明」のスキルが道内平均と比べ低いということが明らかとなった。

小学校時点では道内平均と比べ高いことから、中学校入学後に低下していると考えられ、3小学校から1つの中学校に進学するという現状を踏まえ、自分の考えを発言できる場の設定や少数意見を尊重する指導などの対応を行った。

#### (2) 「ほっと」実施学年

小学校第5・6学年、中学校第1・2学年を対象として実施した。

### 成果（○）と課題（●）

○ 「ほっと」分析結果の解説では、客観的なデータの正確性・有用性について多くの教員が納得しており、研修での意見交換は非常に有意義なものとなった。客観的なデータの活用は、児童生徒の思いを受け止め、共感するなど、個々の実態に応じた生徒指導につながっている。

● 「ほっと」については、生徒指導の成果を客観的に推移として把握できることから継続的に実施し、結果を踏まえた生徒指導の改善につなげていく必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

### 「ほっと」や生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用

室蘭市立桜蘭中学校、室蘭市立知利別小学校、室蘭市立旭ヶ丘小学校、室蘭市立八丁平小学校

「ほっと」を活用して、各学年の傾向や取組の交流と検証を行い、学年・学級集団及び児童生徒一人一人の課題を全教員で共有し、効果的な支援について検討した。

小・中学校の「ほっと」の分析結果から、実践の成果と課題を交流し、指導の充実を図った。

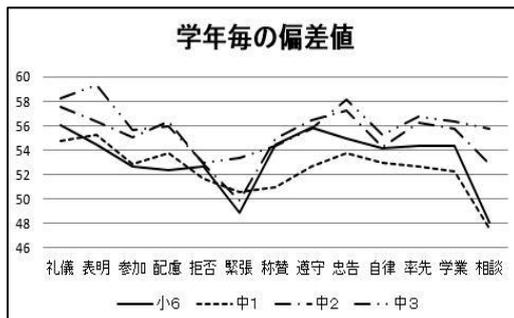
## 取組の実際

### 1 「ほっと」の活用

中学校区の小学校第6学年と中学校第1、2学年の「ほっと」の結果から、全体の傾向を把握し、効果的な支援について検討を行った。

成果としては、昨年度と同様に小学校第6学年、中学校第1学年で全体的に全道を上回っている要素が多く、特に小学校第6学年は、「礼儀」、「尊守」、「忠告」、「率先」、「自律」の要素が高く、中学校第1学年では、「参加」、「学業」が高い傾向にあった。

課題としては、「緊張」の要素が挙げられ、児童生徒が他者からの評価に敏感になり、緊張や不安によって話ができず、相談や自己開示がしづらい傾向が見られた。



【桜蘭中学校の「ほっと」の分析結果】

### 2 「ほっと」の分析結果の交流

小・中学校での「ほっと」の分析から、数値が高い要素とそれに関連する取組について交流した。

#### (1) 旭ヶ丘小学校の「ほっと」の分析と関連する取組

1回目と比べ、2回目は全要素で高くなっていた。他の2校と比較して「礼儀」、「表明」、「緊張」、「自律」、「学業」の数値が高く、児童の学校生活における満足度が高いことがうかがえた。

※関連する取組：「小学校第6学年によるお世話活動」、「行事でのメッセージ交換」、「学年間の相互交流」

#### (2) 知利別小学校の「ほっと」の分析と関連する取組

「礼儀」、「表明」、「称賛」、「率先」が高く、児童が互いを認め合うことが自然にできる集団だと考えられるが、「緊張」に大きなばらつきが見られたことから、集団のリーダーが育てている反面、集団に埋没し「緊張」を極端に抱えている児童の存在が散見された。

※関連する取組：「全校遊び」、「挨拶運動」、「縦割り班による清掃活動」

#### (3) 八丁平小学校の「ほっと」の分析と関連する取組

「礼儀」、「表明」、「称賛」、「遵守」が大変高かった。「相談」が極端に低く、悩みを抱え込んでいる児童の存在が散見された。

※関連する取組：「縦割り班活動」、「『立ち止まって、礼をして、あいさつをする』活動」、「生活づくりカレンダー」

### 成果 (○) と課題 (●)

○ 小・中学校の学級毎に、「ほっと」の分析結果から児童生徒の現状の把握と取組の検証を行うとともに、中学校では、「Q-U」の結果と関連付け、個人や集団の見取りを行うことができた。

● 教員の異動等があっても、「ほっと」や「Q-U」等の客観的なデータに基づく現状の把握と取組の検証及び成果の確認が継続して行われるよう、分析や活用等に係る研修を行う必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

「ほっと」や生活アンケートの実施（年2～3回）、分析及び校内研修や学年会議等での活用

新ひだか町立静内中学校 新ひだか町立静内小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

中1ギャップ問題未然防止担当者を中心とした「小中連携会議」による子ども理解支援ツール「ほっと」を活用し、小中共通の観点による児童生徒の現状把握を交流することでコミュニケーション能力（人間関係づくり能力）の育成を図っていく。

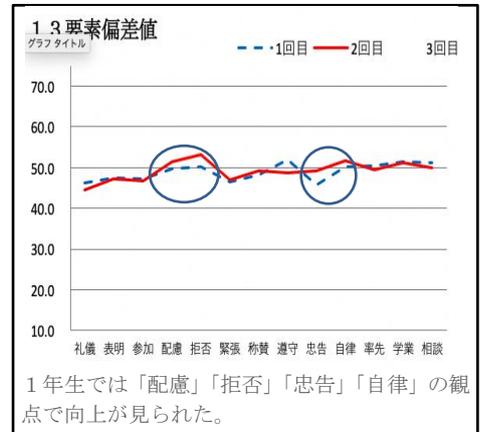
## 取組の実際

### 1 子ども理解支援ツール「ほっと」を活用した児童生徒理解

静内中学校では、平成27年度から子ども理解支援ツール「ほっと」を全学年全学級で実施し、学級や生徒一人一人の状況把握に努め、不登校対策に生かしてきた。

今年度から推進校である静内小学校6年生でもこの「ほっと」を1学期末と2学期末に実施し、それらの結果を分析するとともに小・中両校で交流し、不登校対策だけでなく、ギャップを乗り越えるコミュニケーション能力育成や不登校対策に生かしていくこととした。

これまで、町教育研究団体の生徒指導部会で小・中の生徒指導面での交流はなされてきたが、今回、共通の観点でのアンケート調査を行うことで、コミュニケーション能力や不登校につながる観点が明確になり、それらに対する指導や対応策を具体化することができた。



⑨困ったことや悩みを他の人に相談することができる。	
学年平均	2.7
担任評価	2
分布表	分析結果
	<ul style="list-style-type: none"> <li>●素直に相談することができず、行為にためらいを見せる児童が多い。</li> <li>●関係構築を図る取組を今後実施する。</li> </ul>

⑩友達に本音で話すことができる。(緊張)	
学年平均	2.2
分布表	分析結果
	<ul style="list-style-type: none"> <li>●本講の課題となる分野。</li> <li>○1年の学年平均が他学年に比べて高いので、この数値を低下させないよう、道徳や特活などで人を信じることや期待に応えることの喜びなどを考える機会をつくってきたい。</li> </ul>

これらは、「ほっと」の『相談』の項目に関する結果と各校での分析。小・中の結果の差異とともに、他の質問項目との関連も同時に分析することにより、小・中で児童生徒の実態把握と連携した取組を具体的に話し合うことも可能となった。

⑪困ったことや悩みを先生や友達に相談することができる。(相談)	
学年平均	2.8
分布表	分析結果
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○担任との人間関係がきちんと構築されているので、困ったことを教師に相談することが多い。</li> <li>●⑨の回答から、生徒同士で相談するとしても本音の話しができないことが予想される。</li> </ul>

### 成果(○)と課題(●)

- 質問項目の共通化で分析と対策が具体化され、小・中が共同で児童生徒にどのような指導を行うかの話し合いを効率的に行うことができた。
- 実施の時期が1・2学期末だったため、分析に十分な時間を取ることができたが、指導の期間は短くなってしまった。各学期初めに行うことでよりタイムリーに指導を行うことができる。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

「ほっと」や生活アンケートの実施（年2～3回）、分析及び校内研修や学年会議等での活用

長万部町立長万部小学校・長万部町立静狩小学校・長万部町立長万部中学校

### 効果的な取組とするためのポイント

子ども理解支援ツール「ほっと」の結果を分析し、各学校において教育活動・学級経営の改善に生かしている。また、町内2校の小学校が連携し、合同の行事等を行うことで、効果的な児童同士の関係づくりを進めている。

## 取組の実際

### 1 子ども理解支援ツール「ほっと」の活用

コミュニケーション能力や日常生活等への満足度など、児童生徒をより深く理解することを目的に、子ども理解支援ツール「ほっと」を6月と11月の年2回実施している。実施後は、結果を分析し、一人一人の児童生徒の課題解決を図る指導・支援の工夫・改善に努めている。

長万部小学校において6月に実施した第6学年児童の結果から、「参加」及び「緊張」の要素に課題があると分析し、次のような取組を行った結果、11月の調査では改善が見られた。

- ・互いを尊重し、認め合える支持的風土のある学級経営を進めることができるよう、学級経営計画を見直し、学級で互いが認められる場を設定するよう改善を図った。
- ・思ったことや考えたことについて進んで対話できる授業に向けて改善を図り、学校行事では具体的な子どもの姿を設定し、達成感、満足感や自己有用感が得られる取組を進めた。

【長万部小学校第6学年児童の子ども理解支援ツール「ほっと」の結果】

	礼儀	表明	参加	配慮	許否	緊張	称賛	遵守	忠告	自律	率先	学業	相談
6月	53.0	55.3	48.5	56.3	51.4	49.2	54.8	54.7	53.9	52.7	54.7	55.0	51.3
11月	53.5	54.6	51.6	56.1	53.2	51.8	53.2	53.7	52.2	54.4	55.7	57.2	52.6

### 2 小・小連携の取組

本町では、子ども理解支援ツール「ほっと」によって課題が見られた項目の解消に向け、小・中学校の連携の取組だけでなく、小学校同士による連携の取組も重点に進めている。静狩小学校の課題についても明確にした上で、次のような合同の取組を計画的に実施している。

標準学力検査（第2～6学年）、修学旅行（第6学年）、社会科見学（第3学年）、宿泊研修（第5学年）、音楽鑑賞会（全学年）、持久走大会（全学年）、歌声集会（全学年）、租税教室（第6学年）、中学校1日体験入学（第6学年）

### 成果（○）と課題（●）

- 子ども理解支援ツール「ほっと」による客観的なデータを基に、児童生徒のよさや課題を把握し、指導の工夫・改善に生かすことができた。
- 子ども理解支援ツール「ほっと」のデータにおいて、過去数年にわたり課題として挙げられる項目があるため、小・中学校全体の課題として捉え、効果的な取組を計画的に行う必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

学校行事、児童会・生徒会活動、クラブ活動や部活動、自然体験活動、ボランティア活動の合同実施による児童生徒の交流など、小・中学校が連携した取組の実施

江差町立江差中学校  
江差町立江差小学校・江差町立南が丘小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

小学生にとって、中学校は兄弟がいない限りは情報の入ってこない未知の領域であり、特に先輩との人間関係に関する不安を抱えている児童が多い。そこで、中学生と身近に触れ合える機会を増やすことで不安を解消するとともに、人間関係づくりの能力の育成を図り円滑な接続を目指す。

## 取組の実際

### 1 部活動体験

今年度から小学生の児童が中学校の部活動を体験する場を2日間設定した。期間中、児童は最大で4種類の部活動の体験を行うことができた。中学校の生徒が主体的に児童に対して練習の方法を指示したり、アドバイスをしたりする姿が見られた。

小学校の早い段階から部活動への加入についてゆっくりと考えて、自分自身に合った部を選択し、3年間を通じて部活動に取り組めるようになることも、この取組の目的の一つである。



【部活動体験】

### 2 小学校への夏休み・冬休み学習ボランティア

生徒会執行部のボランティア活動として、「小学校への夏休み・冬休み学習ボランティア」を行った。小学生は中学生に宿題を教えもらったり、休憩時間に一緒に遊んでもらったりして交流を深めることができた。



【学習ボランティア】

### 3 中学校入学説明会時の生徒への質問タイム

「中学校入学説明会」の際に小学生の不安や疑問について、中学生が答える「質問タイム」を行った。質問内容は12月に行われた「1日体験入学」の際に江差小学校と南が丘小学校の児童が話し合いをして考えた。中学生のメンバーは生徒会執行部や各学年の代表者で構成されており、前もって質問の答えを用意しているので、自信をもって小学生に教えることができていた。



【質問タイム】

### 成果 (○) と課題 (●)

- 身近に触れ合いながら交流する機会を増やすことで中学生への不安感はなくなり、好ましい印象を与えるきっかけとすることができた。
- 人間関係づくりの能力のさらなる向上を目指すために、交流の前に望ましい言葉遣いや触れ合い方についての事前指導を行う必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続による工夫改善

「ほっと」や生活アンケートの実施（年2～3回）、分析及び校内研修や学年会議等での活用

東川町立東川中学校・東川町立東川小学校  
東川町立東川第一小学校・東川町立東川第二小学校・東川町立東川第三小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

中1ギャップ解消に向けた課題を明確にするために、全ての小・中学校で年2回、子ども理解支援ツール「ほっと」を実施している。また、各学校で結果分析を共有し、児童生徒の実態把握をすることで、きめ細かな指導の充実を図っている。

## 取組の実際

### 1 子ども理解支援ツール「ほっと」の結果と分析

- ・7月に実施した「ほっと」の1回目の結果、中学校第2学年及び第3学年においては、全ての項目で平均を上回ったが、第1学年においては、「拒否」、「緊張」、「相談」の3つの項目で平均を下回った。
- ・「ほっと」の結果から、特に、第1学年においては、中学校生活に対する不安や緊張を感じており、加えて「相談」の項目が低くなっていることから、不安や悩みなどを他者に相談しづらい状況にあることがわかった。

1 3要素	東川中 3年平均	東川中 2年平均	東川中 1年平均	東川中 1 A	東川中 1 B	東川中 1 C
礼儀	54.5	57.3	53.4	52.0	53.9	54.3
表明	55.3	53.9	51.5	50.6	53.8	50.2
参加	55.4	56.3	52.0	52.7	53.0	50.4
配慮	54.0	57.4	52.4	52.0	54.0	51.3
拒否	51.2	52.4	49.9	48.6	49.9	51.1
緊張	51.4	50.2	47.4	45.8	46.3	50.1
称賛	52.9	55.4	50.0	50.0	50.8	49.2
遵守	51.3	55.5	53.2	51.9	52.8	55.1
忠告	57.2	57.7	53.6	54.4	52.5	53.8
自律	52.1	53.4	51.3	51.5	52.5	50.0
率先	54.9	54.6	52.6	53.5	53.1	51.1
学業	55.2	54.8	51.8	51.5	52.4	51.7
相談	53.0	50.4	46.2	47.5	44.8	46.4

【「ほっと」1回目の分析結果】

### 2 分析を生かした重点的な指導

- ・環境の変化への不安を取り除くための早期の教育相談や自己有用感を高めるための教育活動の工夫、互いを認め合う場の設定、生徒が一人で抱え込まず気軽に相談できる教職員の体制づくりを進めた。
- ・生徒の抱える悩みを見過ごすことがないよう、生徒との信頼関係を築き、生徒理解に基づいた教育相談の充実に努めた。
- ・第2学年及び第3学年においては、緊張など数値が低くなっている項目を焦点化して教育相談を実施するなど工夫したことで、個に応じた指導を推進することができた。

### 成果（○）と課題（●）

- 「ほっと」を活用することで、多面的・多角的な視点から生徒理解を深めることができた。また、分析結果を各小・中学校間で共有するとともに、平均を下回った項目について教職員の共通理解の下、重点的な指導を行うことができた。
- 小・中学校の円滑な接続に向けて、今後も「ほっと」を有効に活用しながら児童生徒の実態を把握し、成就感・達成感が高まるような活動を推進する必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

「ほっと」や生活アンケートの実施（年2～3回）、分析及び校内研修や学年会議等での活用  
 天塩町立天塩中学校  
 天塩町立天塩小学校・天塩町立啓徳小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

加配教員が中心となって、「ほっと」の分析をするるとともに、昨年度の全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙と今年度実施した各種アンケートの結果を比較し、児童生徒の変化の様子を分析して指導の改善を図った。また、これら各種の分析結果を資料として各校の校内研修や合同研修会において職員間で共有するとともに、児童生徒の実態を踏まえた指導の改善に努めている。

## 取組の実際

### 1 子ども理解支援ツール「ほっと」の分析を踏まえた指導の改善

	礼儀	表明	参加	配慮	拒否	緊張	称賛
小6	54.0	55.1	54.3	53.6	55.5	47.3	55.7
中1	57.3	57.7	57.3	57.4	51.6	47.4	55.4
	遵守	忠告	自律	率先	学業	相談	
小6	58.7	57.2	56.0	60.4	58.7	55.3	
中1	53.8	57.8	56.3	57.1	55.6	52.9	

今年度の小学校第6学年と中学校第1学年の児童生徒は、「緊張」の数値が低い傾向が見られた。

「友達にどう思われるか不安」「緊張して人前で話せない」という気持ちが、中学生になっても続いている様子が一因として考えられる。このこと

から、児童生徒同士の関わりを増やす取組やコミュニケーションスキルを育成する取組を重点的に行うとともに、来年度以降、小学校同士の連携の取組を強化することとした。

### 2 各種調査の比較分析を踏まえた指導の改善

※各項目の数値は肯定的に回答した児童生徒の割合 ( )内は「当てはまる」と回答した児童	平成29年度全国学力・学習状況調査児童質問紙（小学校第6学年の回答）	平成30年度の生徒アンケート等（中学校第1学年の回答）
自分にはよいところがあると思う	76%（19%）	84%（32%）
友達の考えを受け止めて自分の考えをもつ	90%（57%）	100%（60%）
失敗を恐れなくて挑戦する	91%（38%）	100%（70%）
学校に行くのは楽しい	81%（43%）	79%（63%）
いじめはどんな理由があってもいけない	95%（86%）	100%（95%）

各種調査結果を経年比較することで、児童生徒の変化の様子を適切に把握することができた。状況は改善傾向にあり、小中連携の取組が一定の成果を上げているといえるが、「学校に行くのは楽しい」の項目では、「当てはまる」と回答した生徒の割合が高くなったが、肯定的な回答をした生徒の割合は低くなっていることから、今後その要因を分析し、学校生活に対する満足度を高める取組を検討する必要がある。

#### 成果(○)と課題(●)

- 町内の児童生徒全体の実態把握や、同じ集団の結果の経年比較・分析をすることで、成果や課題が明確になり、取組の検証・改善を行うことができた。
- 調査結果の分析結果から得られた課題に関して、今後ともその要因を分析して今後の指導に生かす必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

学校行事、児童会、生徒会活動、クラブ活動や部活動、自然体験活動、ボランティア活動の合同実施による児童生徒の交流など、小・中が連携した取組  
 斜里町立斜里中学校・斜里町立斜里小学校・斜里町立朝日小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

新入学生は中学校入学に様々な不安を抱えており、不安解消の一環として取り組んでいる小・中の交流は大きな役割を果たしている。児童が様々な活動を通じて、中学校の生徒や教員との関わりをもつことにより、児童がもつ不安が薄れ、中学校への理解が深まっていく。小学校第6学年を対象に「相談アンケート」を実施し、事前にとり組の内容を精査しておくことが重要である。

## 取組の実際

### 1 「乗り入れ授業」「出前授業」の実施

乗り入れ授業は外国語活動を中心に、出前授業は音楽科、社会科、理科、外国語活動で実施した。児童は中学校の授業スタイルや雰囲気を感じること、中学校は児童の実態や学習規律の定着状況の把握等をねらいとしている。年間をとおして、中学校教員が定期的かつ継続的に小学校を訪問し、コミュニケーションを図ることで、児童の不安解消につながり、意欲が向上した。また、中学校教員は長期的な展望をもって段階的な指導に努めるとともに、新入生の実態に伴った全体指導計画を作成することができる。



【音楽科による出前授業の様子】

### 2 新入生一日体験入学の実施

斜里中学校区小学校2校を対象に、「一日体験入学」を実施した。学習規律をはじめ、本校独自の学習プログラムや日課、生活規則の説明が行われた。児童は、授業や部活動の見学を行い、中学校の生活や学習を体験した。児童が体験入学をしている間は、小・中学校の教員が情報交換の時間をつくり、今後の指導の方針等を協議する機会を設けた。



【一日体験入学の様子】

### 3 中学生による演劇ワークショップの実施

斜里中学校第3学年で演劇団に所属する生徒が、中学校区2校の小学校を訪問し、学芸会に向け演劇ワークショップを実施した。演劇における「発声法」や「シーン」ごとの見本演技、練習への取組方や心構え等、小学生へアドバイスをを行った。このことにより、児童がもっていた「中学生の先輩がこわい」といった印象を払拭することができた。

### 成果（○）と課題（●）

- 乗り入れ授業や出前授業を実施したことにより、小学校と関わる機会が増加し、児童は中学校や生徒への不安が薄れ、中学校は生活や学習状況を把握することができた。
- 本事業の取組の意義を広く周知し、時間と人材を確保するための協働体制を整備する必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

「ほっと」や生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用

音更町立下音更中学校  
音更町立下音更小学校・音更町立鈴蘭小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

小学校第6学年で子ども理解支援ツール「ほっと」を年2回、中学校全学年で「hyper-Q-U」を年2回実施している。分析結果から明らかになった学年・学級集団や児童生徒の実態を、中1ギャップ検討委員会で共有し、各校での指導方法の工夫、改善に努めている。

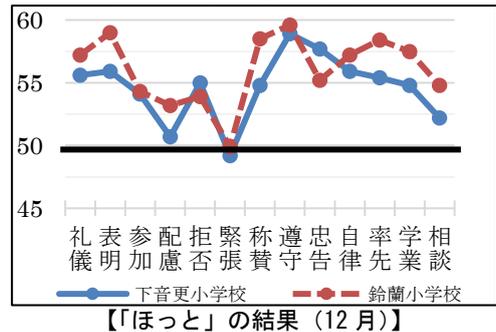
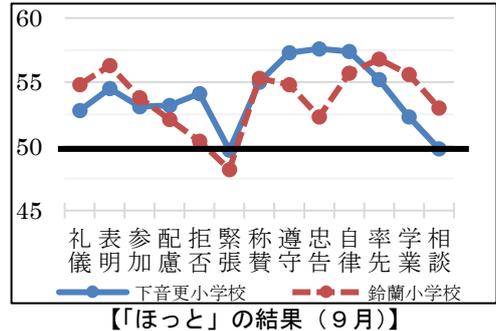
### 取組の実際

#### ○ 「ほっと」及び「hyper-Q-U」の実施と分析

##### (1) 「ほっと」の実施と分析

小学校では、「ほっと」を年2回（9月と12月）実施し、加配教員が、学年及び学級の結果について分析し、中1ギャップ検討委員会で、支援の在り方について検討するとともに、授業改善及び学級経営に活用した。

児童の実態として、2校とも全体的に全道平均を上回っており、特に下音更小学校は「遵守」「忠告」「自律」等の項目、鈴蘭小学校は「表明」「率先」等の項目が高い傾向があること、課題として、2校とも「緊張」の項目が低い傾向がみられたことから、他者からの評価に敏感になることで、相手の顔色を過剰に伺い、緊張や不安によって話すことができず、相談や自己開示がしづらい傾向があると分析し、授業において、違いを認められる雰囲気をつくったり、異学年交流等において、自信をもたせ



##### (2) 「hyper-Q-U」の実施と分析

中学校では、「hyper-Q-U」を年2回（7月と12月）実施し、学級担任が分析し、教職員全体で共有するとともに、学級経営の改善に活用した。

生徒の実態として、「学級生活満足群」に位置する生徒の割合が、70%を超えていることから、多くの生徒が学級内に居場所があり、学校生活を意欲的に送っていること、課題として、「侵害行為認知群」及び「学級生活不満足群」の生徒の割合が増加していることから、生徒一人一人が学校生活意欲プロフィール（友人、学習、学級、進路、教師の5領域）の中で、学校生活において何を拠り所としているか、どの領域で不安を抱えているか把握し、今後の指導や支援の在り方について検討した。

侵害行為認知群 4%	学級生活満足群 72%
学級生活不満足群 8%	非承認群 17%

侵害行為認知群 10%	学級生活満足群 74%
学級生活不満足群 10%	非承認群 7%

【下音更中学校第1学年の「hyper-Q-U」の変化】

#### 成果 (○) と課題 (●)

- 小・中学校で、「ほっと」及び「hyper-Q-U」の分析結果を共有することにより、客観的なデータから中学校区におけるコミュニケーション能力の成果や課題について共通認識をもつことができた。
- 中学校区での児童生徒理解を一層確かなものとするために、「ほっと」の活用を小学校第1学年から継続的に行っていく必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

よりよい人間関係を築くために必要な社会的スキルを育成する活動の教育課程への適切な位置付け

標茶町立標茶中学校・標茶町立標茶小学校・標茶町立磯分内小学校・標茶町立沼幌小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

小学校間の連携による児童交流会を実施することで、中学校入学前によりよい人間関係づくりの土台をつくる。また、各教科や特別活動等で、自殺予防教育や「エゴグラム」、「グループエンカウンター」等の活動を位置付け、人間関係づくりに関わるスキルを身に付けさせる取組を進める。

## 取組の実際

### 1 標茶中学校区の小学校3校交流会

標茶中学校区の3校の小学校の学校規模が異なることから、特に小規模校の児童が大きな集団に慣れることを目的とし、平成29年度から3校の小学校が合同で、中学校体験入学の前に交流会を実施している。今年度は交流会の内容と回数を見直し、中学校体験入学前と3学期に2回実施した。そのうち2回目は加配教員が窓口となり、中学校教員による小学校での合同授業を実施した。この取組を通して、児童が早期に人間関係を築くとともに、中学校教員との関わりが増え、中学校入学への不安の解消につなげることができた。



【ゲームを通じた交流の様子】



【ゲームを通じた交流の様子】



【給食交流の様子】

### 2 人間関係づくりの能力を育成する取組

各教科や特別活動等で、自殺予防教育や「エゴグラム」、「グループエンカウンター」等の活動を位置付け、人間関係づくりに関わるスキルを身に付けさせる取組を進めたことにより、生徒の自己肯定感が高まるとともに、生徒同士のよりよい人間関係が構築されてきている。

また、各種検査から生徒の実態を明確にし、指導の重点を定め、教育課程の改善につなげる取組を進めている。

### 成果 (○) と課題 (●)

- 標茶中学校区の小学校3校で交流会の実施及び中学校で人間関係づくりに関わるスキルを身に付けさせる取組を進めたことにより、児童生徒のコミュニケーション能力が高まり、「よりよい人間関係づくり」の土台を構築することができた。
- 各学校の課題を踏まえ、育てたい資質・能力を明確にし、組織的・計画的に指導できるよう、教育課程の改善を進める必要がある。

## 2 人間関係づくりの能力の育成を図る教育課程の小・中学校の円滑な接続の工夫改善

よりよい人間関係を築くために必要な社会的スキルを育成する活動の教育課程への適切な位置付け

中標津町立中標津中学校・中標津町立中標津小学校・中標津町立丸山小学校

### 効果的な取組とするためのポイント

加配教員が中心となり、人間関係形成スキルの向上を目指し、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを意図的・計画的に実施した。

## 取組の実際

### 1 「中1ギャップ検討委員会」での課題の分析

本中学校区では、小学校第6学年が中学校に進学した際、不登校生徒数が増加する傾向が見られる。そのため、4月に行った「第1回中1ギャップ検討委員会」で、小学校段階の課題、家庭環境の要因等を分析することで、①社会的スキルの定着が不十分であること、②コミュニケーション不足であることが明らかとなった。これらの課題を踏まえ、計画的・組織的に人間関係形成スキルを向上させる取組を重点にし、小学校から中学校へ進学した際の学習環境や生活環境等の変化から生まれる不安感を軽減する方策について話し合った。

### 2 「自殺予防プログラム」と連動した取組

加配教員が中心となり、生徒の社会的スキル、コミュニケーション能力の向上を図るため、ソーシャルスキルトレーニングの手法を活用し、身に付けさせたい事柄を以下のように設定した。また、「自殺予防教育プログラム」と連動させることで、効果的な実施を目指した。

#### 【自殺予防プログラムとの関連】

(A 援助希求の態度の育成、B 早期の問題認識(心の健康)、C ストレス対処能力の育成等)

#### (1) 基本的なかかわりスキル

- ①あいさつ(A)、②自己紹介(A)、③上手な聴き方(A)
- ④質問する(A)

#### (2) 仲間関係発展・共感的スキル

- ⑤仲間の誘い方(B)、⑥仲間の入り方(B)、⑦あたたかい言葉かけ(B)、⑧気持ちを分かち合おうとする(A)

#### (3) 主張行動スキル

- ⑨やさしい頼み方(A)、⑩上手な断り方(B)、⑪自分を大切にすること(B)

#### (4) 問題解決技法

- ⑫トラブルの解決策を考える(C)



【加配教員による授業の様子】

上記について、学級活動、保健体育科の年間指導計画に位置付けて実施した。

### 成果(○)と課題(●)

- 学習を通して、生徒同士のつながりが深まり、友達からの支援がより実感できたことで、学級不適応感が高い生徒にとって効果的な取組となった。
- 生徒にとって、獲得する必要があるソーシャルスキルは多様であり、発達の段階に合わせた年間計画の改善を図る必要がある。